

【第145回生涯教育講座】

精神疾患患者におけるがん医療格差の克服：
実装科学の理論と実践いな がき まさ とし ふじ わら まさ き
稲 垣 正 俊¹⁾ 藤 原 雅 樹²⁾

キーワード：精神障害，がん医療格差，実装科学，がん検診，多職種連携

要 旨

統合失調症をはじめとする重度精神障害を抱える人々は、一般住民と比較して平均余命が10～20年短いという「健康格差」に直面している。この早期死亡の主因は自殺や事故に留まらず、がんや心疾患といった身体疾患にあることが近年の疫学的研究で明らかになった。とりわけ「がん」に関しては、罹患率が一般住民と同等であるにもかかわらず、死亡率が有意に高いという「がん医療格差」が顕著である。本論文では、わが国におけるがん検診受診率の格差の実態を詳述し、この格差を是正するために開発した「ACCESS 勧奨法」の有効性を、実装科学（Implementation Science）の視点から論じる。ランダム化比較試験（ACCESS-1）の成果を踏まえ、病院での実装戦略（ACCESS-2研究）を経て、日常診療に定着させるためのがん検診勧奨プロジェクト（ACCESS プロジェクト）を中国地方5県で展開している。本稿では、精神科医療において身体的健康を守るための実装戦略について記述する。

1 緒論：精神障害を抱える
人の「健康格差」

現代の精神科医療において、最も解決すべき倫理的・医学的課題の一つは、精神障害を抱える人の「身体的健康の不平等」である。WHO（世界保健機関）の報告や近年の国際的なメタ解析によれば、統合失調症や双極性障害などの重度精神障

害（Severe Mental Illness: SMI）を有する患者の平均余命は、一般住民よりも10年から20年短いことが一貫して示されている（文献1）。この衝撃的な事実、精神症状のコントロールに主眼を置いてきた従来の精神医学に対し、患者の「健康」をいかに守るかという重い問いを突きつけている。統合失調症などの重度精神障害のある患者の死亡リスクは、自殺や事故も当然リスクが高いが、全体としての影響を考慮すると、虚血性心疾患や糖尿病に関連する合併症、そして悪性新生物（がん）がその主因である。デンマークにおける大規模なレジストリ調査によれば（文献2）、精神障害を

Masatoshi INAGAKI et al.

1) 島根大学医学部精神医学講座

2) 岡山大学学術研究院医療開発領域 精神科神経科

連絡先：〒693-8501 島根県出雲市塩冶町89-1

島根大学医学部精神医学講座